

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」

(2017 年度第 3 回研究会)

日時：2018 年 3 月 18 日（日） 13:00-18:00

場所：AA 研マルチメディア会議室（304 室）

概要報告

2017 年度第 3 回の例会として開催された本会では、共同研究員による 2 題の研究報告がおこなわれた。各研究報告に対し、隣接領域の専門家からのコメントがあり、そのうえで全体討論をおこなった。参加者は 12 名であった。

(1) 稲村務（AA 研共同研究員、琉球大学）

「フォークロア概念の終焉：雲南ハニ族の伝承／伝統的知識と柳田国男」

ABS などの国際的知的財産制度などの動向ではその権利を与える集団が必要であり、国民国家形成期に生まれた残余のカテゴリーとして生まれた folk（常民・漢族）や folklore 概念の終焉を考えるべき時期にきている。その上で柳田国男が元来言いたかったのは「民俗学」ではなく「民間伝承論」であり、その Traditional knowledge（伝承／伝統的知識）は本研究プロジェクトにおける言語学・歴史学・人類学においても現代的な文化資源としての視点と可能性をもつ。このことをハニ族の薬草知識の tradition を例に論じ、特に雲南の他の民族医学と比較して文字の優位性などについて討議した。

(2) 澤田英夫（AA 研）

「東南アジアインド系文字の視点からみた雲南および隣接地域の文字」

本発表では、インド系文字のうち雲南と隣接地域のタイ系言語の表記に用いられるタム支派とモン支派シャン＝グループの文字の特徴を観察した。発表者は前者を、クメール支派タイ＝グループをベースにモン支派の要素を加味して成立したと考えてきたが、歴史的にはむしろ逆に、パーリ語表記に用いられたモン文字がタイ＝

グループの要素を受容して多大な変容を遂げたものであるとの指摘を受け、これに同意した。独自の一支派とみなす点は変わらない。前者はモン文字に由来する「アーリア互換」性と、タイ＝グループと共通する活発な子音字の派生を示し、後者は子音字の少なさとそれに伴う非「アーリア互換」性を示す。両者に共通するのは、タイ系言語の複雑な韻体系に対応した表記の拡張である。

(3) 全体討論

本例会が研究計画の最終回であることを踏まえ、これまでの活動の総括および成果論集についての話し合いがおこなわれた。研究代表者より、論文集のスケジュール等が示され、了承された。

(文責：山田敦士)